

4

これからの乳がん検診

乳がん検診の個別化とブレスト・アウェアネス

乳がん検診の個別化とは、年齢や家族歴・遺伝子によるリスクおよび、乳房の状態に応じて、適切な検診の開始年齢や検診方法、間隔を選択することです。たとえば、血縁者が乳がんを若くして発症している女性に対策型検診の開始年齢である40歳よりも若い年齢からセルフチェックを始めたリ、高濃度乳房である女性がマンモグラフィ検診に加えて超音波検査を併用することで、乳がんを早期に発見できる可能性を高めることです。

また、日頃から乳房の状態に関心を持つことにより、乳房の変化を感じたら速やか

に医療機関を受診するという行動習慣を「ブレスト・アウェアネス」と言います。個別化された検診とブレスト・アウェアネスを組み合わせることが、より効果的な乳がん対策につながり、後述の遺伝性乳がんや家族性乳がんの早期発見にも有効と考えられます。

ブレスト・アウェアネスの【4つのポイント】

- 1 ご自分の乳房の状態を知る
- 2 乳房の変化に気をつける
- 3 変化に気づいたらすぐ医師へ相談する
- 4 40歳になったら2年に1回乳がん検診を受ける

column

ヘルスリテラシー

健康や医療に関する正しい情報にアクセスして、正しく理解し活用することです。インターネット上に情報があふれている時代だからこそ正しい情報とそうでない情報を取捨選択できる力が必要です。健康経営や女性活躍などとも関連しているテーマでもあり、ヘルスリテラシーを持つことは個人にとっても企業にとっても重要です。乳がんの場合、本テキストや、医師が監修したYouTube「BCTube」、国立がん研究センターのがん情報サービスなどで正しい情報を学び、正しい医療につながる事が大切です。

遺伝性乳がん卵巣がんと遺伝子検査

血縁者に乳がんや卵巣がんを発症した方がいる場合、遺伝性乳がんの可能性を考える必要があります。最も多いのが、*BRCA1*、*BRCA2*という遺伝子の病的バリエーション(病気の原因となる遺伝子の変化)による「遺伝性乳がん卵巣がん(HBOC)」です。

HBOCには、①比較的若い年齢で乳がんを発症しやすい、②両側乳がんや同じ乳房に複数の乳がんを発症しやすい、③卵巣/卵管がん・腹膜がん・膵臓がんなどを発症しやすい、といった特徴があります。

*BRCA*遺伝子検査は、下の表に示す条件を満たす乳がん患者さんや、HBOC関連がん(乳がん・卵巣がん・膵臓がん)を発症し

た方の**第一度近親者が保険診療で受けることができます。また、血縁者がHBOCと診断されている場合には、ご自身も同じ病的バリエーションをもっているかどうかを調べることができます。

HBOCと診断された場合には、将来的ながん発症リスクに応じた検診や予防的治療を選択することができます。近年は、一定の条件を満たす方に対する*BRCA*遺伝子検査に加え、HBOCと診断された方への乳房造影MRIによるサーベイランスや、リスク低減乳房切除術、リスク低減卵管卵巣摘出術についても保険適用が拡大され、必要な医療を受けやすくなっています。

保険適用で行える*BRCA*遺伝子検査の条件

- ☐ 45歳以下で乳がんと診断された
- ☐ 60歳以下でトリプルネガティブの乳がんと診断された
- ☐ 両側の乳がんと診断された
- ☐ 片方の乳房に複数の乳がん(原発性)を診断された
- ☐ 男性で乳がんと診断された
- ☐ 卵巣がん・卵管がん・腹膜がんと診断された
- ☐ ご自身が乳がんと診断され、*血縁者に乳がんまたは卵巣がん発症者がいる
- ☐ HBOCと診断された**第一度近親者がいる乳がんまたは卵巣がん未発症者

HBOCと診断された乳がん未発症の女性の定期検診 (ハイリスクサーベイランス)

- ☐ 18歳から：セルフチェック(プレストアウエアネス)
- ☐ 25歳から：半年に1回の医師による触診と年1回の乳房造影MRI検査
- ☐ 30歳から：さらに年1回のマンモグラフィ検査を追加

* 血縁者の範囲：父母、兄弟姉妹、異母・異父の兄弟姉妹、子ども、おい・めい、父方あるいは母方のおじ・おば・祖父・祖母、大おじ・大おば、いとこ、孫など

** 第一度近親者の範囲：父母、子、同じ両親から生まれた兄弟姉妹

大切な乳がん検診

乳房に対しては、マンモグラフィや乳房超音波検査に加え、乳房造影MRIを年1回実施するハイリスクサーベイランスが推奨されます。また、乳がん発症前に乳房を予防的に切除するリスク低減乳房切除術によって、乳がん発症リスクを大幅に低減できることが知られています。

卵巣がんに対しても、リスク低減卵管卵巣摘出術という選択肢があります。実施時期については、年齢や将来の妊娠・出産の希望、閉経状況などを考慮しながら、婦人科医と相談して決定します。このように、HBOCと診断された場合には、がんの発症リスクに応じた医療を受けることで、新たながんの発症リスクを低減できる可能性があります。

一方で、遺伝子検査によってがんのなりやすさを知ることは、自身の体質に合った対策を考えることができる反面、まだがんになっていない乳房や卵巣の予防的手術を

検討する必要が生じたり、血縁者への結果の伝え方といった新たな悩みが生じることもあります。そのため、遺伝子検査を受けるかどうかは、ご本人の意思を尊重して決めることが大切です。また、遺伝子検査を受けるタイミングに決まりはありません。乳がんの治療方針の決定に役立つ場合もありますが、検査を受けることに迷いや不安がある場合には、無理に急ぐ必要はなく、担当医や認定遺伝カウンセラーと十分に相談し、ご自身が納得できる時期に検査を受けることが大切です。

HBOCではなくても、家族歴やご自身の病歴から遺伝的な要因が気になる場合は、専門医や認定遺伝カウンセラーに相談してみましょ。遺伝子検査を受けるかどうかにかかわらず、正しい情報を得て、ご自身やご家族にとって最善の選択を考えていくことが大切です。

column

遺伝カウンセリング

遺伝カウンセリングは5000円程度から利用でき、必ずしも遺伝子検査を行うわけではありません。遺伝性乳がんのリスクが高い方には、通常より頻繁なセルフチェックや画像検査が推奨されます。カウンセリング実施医療機関は「遺伝性乳がん・卵巣がん症候群の情報サイト」<https://johboc.jp/kakeitoroku/shisetsulist/>で確認できます。